

文化なんてものはいやしねえ： 地理学における文化観念の再概念化に向けて

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 大阪市立大学大学院文学研究科 公開日: 2024-09-09 キーワード (Ja): 文化, 文化地理学, イデオロギー, 存在論, 抽象化, 物象化 キーワード (En): culture, cultural geography, ideology, ontology, abstaraction, reification 作成者: Mitchell, Don, 森, 正人 メールアドレス: 所属: コロラド大学, 関西学院大学
URL	https://ocu-omu.repo.nii.ac.jp/records/2003000

Title	文化なんてものはありやしねえ：地理学における文化観念の再概念化に向けて
Author	ミッチェル, ドン / 森, 正人[訳]
Citation	空間・社会・地理思想. 7 巻, p.118-137.
Issue Date	2002
ISSN	1342-3282
Type	Departmental Bulletin Paper
Textversion	Publisher
Publisher	大阪市立大学大学院文学研究科
Description	Transaction of the Institute of British Geographer N.S. 20-1, 1995, pp.102-116.
DOI	

Placed on: Osaka City University

Osaka Metropolitan University

文化なんてものはありやしねえ

—地理学における文化観念の再概念化に向けて—

ドン・ミッチェル*
(森 正人** 訳)

Don MITCHELL

There's no such thing as culture

: towards a reconceptualization of the idea of culture in geography.

Transaction of the Institute of British Geographer N.S. 20-1,

1995, pp.102-116.

「新しい文化地理学」における「文化」の再概念化は、諸過程や政治、そして社会生活の他の「諸領域」との相互関係へと関心を転換させる上で重要であるとしてきた。しかしこの再概念化は理論的または経験的な進歩を引き起こしたけれども、文化地理学は「文化」を物象化し続けているし、それに存在論的なまたは説明的な地位を与えている。本稿において私は、そのような物象化が誤った考えであり、また文化地理学は「新しい文化地理学」に従っているためにその論理的な帰結を（存在論的な）ものとして文化は存在しないという認識へといたらせることでより良いものとなるであろうことについて議論する。その代わりに私は、文化という観念（もしくはイデオロギー）の唯物論的な展開に焦点を当てて議論をおこなう。文化地理学における研究対象のこうした一層の再概念化は多くの方法で行われることであろうが、私は本稿で例として、文化観念は現代の都市における生産と再生産のシステムの中でいかに機能しているのか、を提示する。この事例とそれに先立つ議論を通して私は、文化など存在しないという認識することで、われわれは社会的再生産のシステムにおける権力の作用をうまく理論化しうることを示したいと思う。

キーワード：文化 culture 文化地理学 cultural geography イデオロギー ideology 存在論 ontology
抽象化 abstraction 物象化 reification

文化地理学における「文化」の再考

マーヴィン・マイクセル Marvin Mikesell (1978,13) は 15 年以上も前に、「文化という概念をどのように使いたいのかもっと真剣に考えるべき」時期に地理学者が来ていることをほのめかした。その後、地理学内部において文化の新しい概念が確

かに出現した。この概念化は、文化を社会的に構築されたもの、社会的行為者によって積極的に維持されているもの、そして人間の生活や活動の別の諸領域とも関わりをもつ柔軟なものと考えることによって、はっきりと文化超有機体説を否定する (Duncan 1980)。

社会地理学、カルチュラルスタディーズ、文学理論さらには「ポストモダン」人類学における理論的發展を基にして、コスグローヴとジャクソン Cosgrove, D. and Jackson, P. (1987,99) の言葉に

* コロラド大学 (現シラキューズ大学)

** 関西学院大学・院

** 章末に追記あり

よると、現在、地理学者は文化について「人々が物的な世界のありふれた現象を、意味や価値を付与された意味に満ちた象徴の世界へと転換する媒体として」たいてい概念化している。レイモンド・ウィリアムズ Raymond Williams (1982,13)の言葉では、文化とは「システムを通して(他の手段とともに)社会秩序が伝達され、再生産され、経験され、探求されるような、記号のシステムである」(Duncan 1990,15 に引用されている; Daniels 1989 も参照のこと)。いくぶん拡張的に、ジャクソン(1989,2: 邦訳 12-13)は、文化に対するひとつの「作業的な定義」として、「社会集団がはっきりとした生活の型を展開しているその水準」が文化であり、それ自体「世界を理解できるようにするための「意味の地図」なのだ」と示唆した。あらゆる状況において、「文化」は象徴的であり、能動的で、不断に変化する対象であり、また権力関係の中で引き裂かれもするものである。そしてあらゆる状況において、文化はおそらくある事物 thing なのではなくむしろ同定可能なプロセスで、分析的なカテゴリーであり、地図化することが可能な水準もしくは領域 sphere なのである。文化地理学者にとって文化は「存在している exists」ものなのである。

ダンカン Duncan, J. (1980)によるアメリカ地理学会における文化有機体説に対する批判の後でさえ、コスグローヴとジャクソン(1987,95)の次のような主張に賛成する「新しい文化地理学者」¹⁾はほとんどいなかった。

文化は残余のカテゴリーではない。より強力な経済分析が説明せず残した外部変数といったものではないのである。それは変化が経験され、競合され、構成されるような媒介物たる当のものである。

それゆえ、文化とは世界を差異化し、そしてその差異化を理解するための概念を提供するなものかとして特定できる。文化それ自体は、政治や経済や社会関係と何かが異なるとしても、それらと同様にあらゆる点で重要な人間生活の領域なのである。もしわれわれが人間の差異化や行為や経験やせめぎ合いを理解したいと思うなら、それは理論化され理解されるべき重要な存在論的カテゴリーである。もちろんこの意味では、おそらく文化は社会的に構築さ

れるのであるが、それは人間の相互作用を超えて存在する人間の行為や思考の決定因といったものとして概念化されることはない(Zelinsky 1973 参照)。その代わり、地理学者やその他の者は自身の研究の対象を定義するために空間性のメタファーを頼りとしてきた。このために、「文化」は圏域、地図、レベルもしくは領域 domains というかたちで表象される。それは意味や行為の媒体となるのである。

この領域もしくはレベルとしての文化の再概念化は、説明されなくてはならず、また同時に(たとえ文化超有機体的なものでなくとも)それ自体が社会的な因果性をもつといった存在論的な文化を、文化地理学者に信じ続けさせることになる。人間の活動の「領域」と深く結びつけられて巧妙に理論化され理解された文化「それ自体」は、現代の地理学においては、世界を特徴づける物的な差異に対する説明の仕方としてますます用いられている。ダニエルズ Daniels, S. (1989,199)が言うように、「文化は、古典的なマルクス主義のカテゴリーを、いわば消滅させてきた」のであり、またそれによって、日常生活に関する経済主義的な説明があまりにも単純に過ぎることを示してきたのである。事実、生活の別の「領域」を探求しようとする経済主義的な説明から転回する、人文社会科学における「文化論的転回」(Ley and Duncan 1993a; Gregory 1993)として同定されるようになったものと親密に結びついている。人種主義に関する地理学を探究する論集の編者による文章はこの認識の典型的なものである。

権力関係が生産の領域から消費の領域へと移行しており、それゆえに<文化>はますます抵抗の戦略を形づくっていることから、従来の分析者たちが人種化(そしてまさにジェンダー化された関係)を理解しようとしない近視的な否定はなおさら困ったものである(Keith and Cross 1993,27,強調は筆者)。

社会的に構築され高度に媒介された文化は因果的である。そしてこの意味において、「文化」は「経済学」や「政治学」ではできない仕方で行為、振る舞い、抵抗、社会編成などを説明するのである。

超有機体的なもしくは別の不正確な文化の理論化から離れて空間性のメタファーに向かうことには、前景化の効果と、文化が社会的に構築されており、

つねにせめぎ合っていることを示す効果がある一方で、それはまた、文化に関する概念についての新たな疑問を立ち上げてきた。これらの空間的なメタファーは何に基づいているのか？²⁾ 本稿では、私は決定因としての「事物」から漠然とした「レベル」へのシフトが、本質的に空っぽで束縛されない文化の抽象性を物象化することと同様に、社会的な力をなお一層に神話化する効果を持っていることを提示したい。これを別の言い方にすれば、私はダンカン（1980）の地理学における伝統的な「文化」概念の中でみられる物象化の批判を「新しい文化地理学」において展開されてきた文化の概念にも応用することが可能であると考えている。つまり文化地理学者はいまだに、精神的な（そして私は社会的という語を付け加えたい）構築物や抽象物が、実体、すなわち独立した実在もしくは因果的効果を有するものと見てしまう謬見に陥っているのである（Berger and Pullberg 1964-5, 196-211 を受けての、Duncan 1980, 181; Duncan and Ley 1982）。

文化地理学また一般的にはカルチュラルスタディーズにおける混乱の先に（そして確かにそれをもとにすることにより）、「文化」の望ましいさらなる再概念化があると私は示唆しておきたい。この再概念化は、文化というような（存在論的な）ものなど存在しないと主張することによって始められる。どちらかといえば、特殊な歴史的状況の下に発展してきたような、また物的な差異、社会秩序、権力関係を説明する手段として後に拡張された、文化の非常に強力な＜観念 idea＞だけがある（Mitchell, T. 1990）。しかし、あるレベルや媒体もしくは意味体系として定義されようとなかろうと、これらの説明は「文化それ自体」についてではない。これらの「文化」の考え方は物象化を回避していない。むしろそれらは、社会的実践がどのように行われているかということについていまだに全く問われることのない諸仮定となっているものを、まさに地理学の中心部にこっそり持ち込むことによって物象化を永続させるのである。そしてこのことは社会理論家が存在論的な文化という観念なしで済ませるまで、問題であり続けることであろう。その代わりに、まさに文化の観念が、権力と利益の名のもとに「他者」を秩序立てたり制御したり定義したりする試みの手段として、いかに

発展し配備されてきたのか、このことに関心の焦点があて始められているのである。

それは大胆で、どちらかといえば露骨に過ぎるのである。以下、私は、少なくとも広範な概論においてはそれを弁護していこうと思う。そのような「文化」の再概念化は妥当である。というのも、「文化」の内部構造に関するより良い理論を発展させようとする全ての努力にもかかわらず、「新しい文化地理学者」は何か袋小路のようなところにはまりこんでしまっているからである。日常生活の多くの側面に関する社会的創造を探究するような重要な経験的研究は続いているが、どの研究も、文化とは何「である」かについての適切な説明を行うことはできないのである。文化地理学者はその対象を理論化することができないままにいる。私が論じたいのは、分析がこのようななされるため、文化観念が無限の墮落 regress へと導かれてしまうということ、すなわち「文化」の基盤として供される確固とした実在論的な地盤など存在しないということである。それでも、力を持つ社会的行為者は、あたかも「文化」と呼ばれるものが存在しているかのように振る舞い続ける。なぜなら、それこそまさしく観念の力をもたらす「文化」の幻影的性質であるからである。権力に支配された世界においていかに文化観念が作用するのかということに焦点を当てることは、それゆえ二重に重要である。

本稿で、私は「文化」が実在論的に根付いていると考えずにすませる理論的解釈を明らかにし、そのように理解することで、地理学者やその他の人々がどのようにして、（文化「それ自体」よりもむしろ）文化についての観念が力を有する社会的行為者によって展開されてきたものであることを理解することができるのか、それを示す手続きへと進む。私は本稿を、文化観念が社会的実践において現実化 actualize されてきた方法、「文化」の空虚な抽象化が社会的意味と構造化の影響によって充填され凝り固まっているその方法、文化なんてものは存在しない一方、文化観念の存在感がまさにリアルになってしまう方法を提示することによって結論付けるつもりである。この最後の節ではまた、文化観念をより綿密に捉えるために、「文化それ自体」からわれわれのまなざしを取り除くことで、われわれは、ティモ

シー・ミッチェル Mitchell, T. (1990,559) が示したように、「意識ないしは文化の領域と、何らかの純粹に物質的ないしは物理的な領域との間の区別」が「近代的支配形態の効力」を助長する二元論を社会的・歴史的に発展させてきたことを理解することが可能になるであろう。明らかにしておくべきこととして、私のポジションは「新しい文化地理学」やその他のカルチュラルスタディーズにおいて築かれてきた進歩にもとづいて展開されたものであるということである。たしかに私の結論は、すでにこの研究に内在している。私の目的はこれらの結論を明らかにすることだけである。

文化を定義する

「文化」とは途方もなく理解しにくい用語である。ウィリアムズ Williams, R. (1983,87: 邦訳 105) によると、文化の概念は最初「自然の成長物の手入れ」を表す用語として発展してきた。この意味で、文化は自然に対する人間による領有である。次に「文化」は人間の（どちらかという精神の）発達を示すように展開し、結果的に「階級との明確な関連性」を伴う「抽象的な過程もしくはそのような過程の産物」—教養のあるものと教養のないもの—を示すようになってきた（Williams 1983,88: 邦訳 105-106; Cosgrove 1983, も参照）。この区分は文化観念の中心となっている。これらの最初期の進展から、「文化」は差異化し分類するために使われた観念であった。そうして 19 世紀までには、多様なヨーロッパの伝統³⁾において、「文化」という用語は科学的言説やそして日常の言説において 3 つの特殊な方法で使用されるようになったのである。

(1) 知的, 精神的, 美的発展の一般的過程...

(2)...一般的に使われても, 特殊な意味で使われても, ある国民や時代や集団の特定の生活様式, (3) 知的, そしてとくに芸術的活動の作品や実践... (Williams 1983,90: 邦訳 109)

文化という概念についてウィリアムズが行った異なる用法間の差異は重要である一方で、より重要なのは、「日常的」と「学問的」、このどちらの)実践

においても、これらの区分はしばしば完全に融合させられるという事実である。ウィリアムズ (1983,91: 邦訳 110) が示したように、

(「文化」という語に関する)さまざまな意味の複合体は、一般的な人間の成長と特定の生活様式との関係、およびこの両者と芸術、知性の作品と実践との関係に関する複雑な議論を示している。

したがって、文化観念は 3 つではなく、5 つの事物を描写することになる。すなわち(1)人々(「文化」)の現実の、ときに裏付けされていないパターンや差異化、(2)それらのパターンが発展される(「文化」が「諸文化」を作る)プロセス、(3)ある人々と他の人々との間の差異を示すもの(個々人は「ある文化」の一部である)、(4)それら全てのプロセスやパターンや目印が表象される方法(「文化的活動」)、(5)それら全ての活動・プロセス・生産様式の階層的秩序化(「諸文化」の比較)。そしてカルチュラルスタディーズにおける影響的な論集の編者が示すとおり、

文化は観念・態度・言語・実践・制度・権力構造を含む生活様式としても、また文化的実践の全領域—つまり芸術的な形態、テキスト、大砲、建築、大量生産された日用品など—としても理解される。(Nelson et al. 1992,5)

文化は全てなのである。

アメリカの文化地理学において、文化という語に関するこれらの意味は、今世紀の半ばまでに大なり小なりその文化の個人的な成員の意思や欲望の上に、またそれを越えて存在する超有機体的な体系として表象されるようになった⁴⁾。おそらくもっとも極端ではっきりとした超有機体的なポジションからのものの言い方はゼリンスキー-Zelinsky, W. によってなされた(1973,71)

文化のシステムは単に様々な特質の雑多な貯蔵であるばかりではない。それとは正反対に、その多くの構成要素は秩序付けられているのである。さらにいえば、文化の全体性はその諸部分の単なる総和以上の重要なものであり、したがって、内的法則のいまだ曖昧な組み合わせによって生きた変化するひとつの超有機体的な実在物であるかのように見受けられるのである。

個々人の精神はそれを維持するために必要とされるが、ある卓越したプロセスによって、ある人間もしくは彼[ママ]の意思から全く離れて、文化はまたそれ自体に頼って生き、ある種の「マクロな観念」として、特別な実存様式と一組の規則をもつ共有された抽象化として存在しているのである。

クローバーとクラックホーン Krober, A. and Kluckhohn, C. (1963) による「文化」の定義に関するレビューに従いながら、ゼリンスキー (1973,70) は次のように超有機体的なポジションを要約した。

...文化は、行為に関わる構造化されたまたは一組の伝統的なパターンであり、観念や行為に対するコードもしくは鋳型として見なされうる。それは文化集団または下位文化集団にとって非常に種別的であり、大体は言語を通して、また生態学的な意味を通じてではなく、むしろむしろ象徴的な意味を通じた転送 transfer によって存続する。もっとも本質的な意味において、文化は、世界についての、自己についての、そのコミュニティの像 image なのである (強調はオリジナル)。

これは言語とイデオロギーの重要性を持ち出すための、文化観念に対する大変複雑な解釈である。それは、別個の、有界で、局所化された社会的総体の属性 (もしくはそれらに帰するべきもの) として文化が捉えられるという程度を際立たせる。文化や文化のシステムは本質的で、有限で、内的に創造されたものである。つまり文化とは「世界についてのイメージであり、自己の、そしてそのコミュニティのイメージ」なのである。

もちろん「新しい文化地理学」は、ゼリンスキーの言明によって示された文化超有機体説をはっきりと否定することによって始められたものである⁵⁾。「新しい文化地理学者」は、文化を静的なものないしは自然に見えるような非常に緩慢に変化するものとみなすような立場を超えて進み、「内的仕組み」⁶⁾もしくは「文化」の内的な構造化を理論化することにはっきりと照準を合わせたのだった。ここで私は、地理学における「文化」のより影響的な再定式化に関する2つの例を考えてみたい。すなわち、ダンカン Duncan, J. (1980) による意味作用体系として文化の展開と、ジャクソン Jackson, P. (1989) によるレベル、領域、慣用、媒介としての文化の理論化で

ある⁷⁾。これらの定義はいくつかの点でそれぞれ全く異なっている。例えば、ダンカンはジャクソンよりも言説の理論を強調した。しかし、これらの定義は、「経済」や「政治」から分離可能なく (しかし関連もしている) 社会生活の圏域ないしは領域として「文化」を理解するという点で多くの親和性を共有してもいる。両者はともに、文化を (それ自体、文化観念は別のものとして) 社会的に構築されたものとして、またつねに競合するものとして考えていた。文化に関するダンカンとジャクソンの議論を考察することによって、このコンセンサスが「文化」の全体的な構成に関する思考体系の統一性を必ずしも意味しないということを了解する一方で、地理学における「文化」をいかに理論化するかということに関して新たに起こりつつあるコンセンサスを捉え始めることが可能になったと思われる。これらの定義はまた「文化」が地理学において物象化されたままであることをよく表している。

ダンカン (1990) にとって、文化はある一組の「物的かつ実践的な本質」であるけれど、一連の意味作用体系なのであり、それは「多様な読み方を自身に貸与する」テキストとして見なされうる。これらのテキストの読解や解釈については複雑な政治学があり、それ自身、多種でより局所的な「言説領域」に分解されうるものである。それだから、ダンカンが1980年に主張したように、文化は物的で実践的ではあるものの、社会的相互作用にではなくて、「より大きく広範に共有された文化的圏域」を構成する言語や言語の政治学に還元される。ダンカンが主張するに、この文化へのアプローチが持つ価値は、文化を「他の全ての社会体系の中に現前し、またそれ自体によって他の全ての体系を明らかにする...」ひとつのシステムとして文化をとらえることである。「有益な違い」はそれゆえに、経済学、政治学、レジャーなどといったものの間に設けられたような「資本主義的秩序のなかにおいて歴史的に発展してきた別個の分析という習慣」(Williams 1982,209; Duncan 1990,15 より引用) をまさに避けることによって維持されている。

しかしダンカン (1990) の定式化において、言語それ自体を越えて、文化とは何なのかを捉えることは難しい。仮にそれが単に言語に過ぎないのであれ

ば、なにゆえに区別された概念が「文化」と呼ばれるのか？ もし「文化」が言語以上の—もしくは異なる—ものであるなら、ダンカンとは、「景観は、それを通じて社会システムが、伝達され、再生産され、経験され、探求される意味作用システムとして機能する文化システムないしテキストにおける中心的要素のひとつである」と主張することを越えて、(何か別のものに相反するものとして)文化とせしめる、意味作用システムの構成要素を直接に同定したりすることは決していないだろう。ゼリンスキー(1973)の公式化においては、言説や象徴性は文化や文化的コミュニケーションの本質的な側面である。両者にとって文化は、ゼリンスキー(1973)が示したように「象徴的手段を通して」伝達されるのであって、「実質的に言語を通じて全て」伝達される「というのではない...」。これらの著者にとっては何かが明らかではあるのであろうが、示されたものは決して定義されていない。文化の内的構造はぼんやりとしたままである。

同じ様な問題はジャクソン(1989)によって示された文化の概念化にもみられる。文化はひとつのレベル、媒介、あるいは慣用とみなされているが、しかし彼の論考のどこにもこれらの圏域を構成するものについての理論的な議論はない(しかし何がそれらを<例証している>かについては以下を参照のこと)。ジャクソン(1989,180:邦訳220-221)は、結局「文化」とは定義不可能であることをほのめかし、「文化の要素...は捉えがたく、最良でも、それを通じて意味が構築され、折衝され、経験されるプロセスという見地から間接的にアプローチすることしかできない」と示唆する。彼は、地理学者は「形容詞の意味で「文化的な」ものに集中」すべきであると主張している。しかし彼は、再活性化された文化地理学は文化を強調しつつけるだろうと議論しながら、「より実質的な用語において「文化」それ自体」というものを信じ続けているのである⁸⁾。間接的にアプローチしようとそうでなかろうと、文化は存在しているように見受けられる。たとえそれがつねに間接的にアプローチされねばならないものであるとしても、それは結果的には種別化され、地図化され、説明され、説明として使用されうる、とジャクソンは希望するのである。

上記の中で、ジャクソンはプロセスとしての文化に焦点を合わせていたが、彼はそのような概念化に制限することを意図しているのではない。彼は(1989)、われわれが「文化」とは「日常生活の全体」を意味するというウィリアムズの言葉を思い出さねばならないと議論している。それゆえ近年ジャクソン Jackson, P. (1993,208) は、デヴィッド・ハーヴェイ David Harvey を、彼の分析では「全体的な生活様式としての文化についてほとんど議論を」行っていないということで非難したのである。文化的圏域において、ジャクソンは「人種」と「ジェンダー」、闘争と抵抗、言語のポリティクス、権力の言説、スタイルの様態、階級とイデオロギー、これらの構築や作用を論考している。しかしながら、いかにして、もしくはなぜ、この活動とプロセスのリストが「より実質的な用語において「文化」それ自体」を構成しているのか、ということは、決してジャクソンの分析では明らかではない。もしくは、別の言い方をすれば、当然のことながら「文化」とは彼がそれぞれの相互関係を考察しようとしたような社会的プロセスの広範な配列以上のものであって、このことが明らかにされていないのである。ダンカンと同じく、文化の内的な構造は曖昧なままである。

ジャクソンの研究だけでなく全体的に(旧い方も新しい方も)文化地理学における研究を通して、「文化」の詳述は通常、おそらく(そしてそれ自体はつきりと)文化を構成する膨大な諸事例—日常生活、芸術作品、政治的抵抗、経済的フォーメーション、宗教的信仰、衣服のスタイル、食習慣、イデオロギー、観念、文学、音楽、大衆メディア等々—によって取って代わられる。何でもかんでもが文化なのである。それゆえにおそらく、「文化」という語は、経済や政治に還元されえない生活の範囲を示すための単に手頃な省略術なのである。おそらくそれは、世界を特徴づける一連の途方もない差異を理解するために必要な抽象化である。もしそうであるなら、それはあまりにも混沌としていて、分析の道具として役に立てることはできなくなってしまう。つまりそれは媒介やレベルとして、あるいは人々がそれら自身ないし他者の生活を理解するために参照する記号体系でもありえない。まさに、このことは、「文化」それ自体は、少なくとも内的に構造化され首尾一貫

した領域、水準、慣用もしくは事物としては存在しないことを、自ら主張しているのである。むしろそれは単に活動のリストである。

重要なこととして、単に「文化」を他に分類の仕方を知らない無数の活動に対する便利な語として見なすことは、オルウィッグ Olwig, K. (1993,907) の言葉で言えば、いかに「文化」というような語が「社会において権力を行使する人々の正統性に同意しながら、今まさに進行中の「隠された」言説」に参画しているかということを見逃してしまう。日常の言説におけるように、社会科学を通して、「文化」は分析に用いられている活動のリストは継続的に文化としてまとめられる。そしてひとつの抽象化として、「文化」は継続的に新たな意味を充填され、存在論的な所与としてまとめられるのである。たとえ誰も「文化」というものを特定できないとしても、というよりは特にそれだからこそ、「文化」は確かに説明や、所与の原因を示す真意として強化される。「文化」は、権力を配列し、世界における区別を組織化するために有効な道具となるが、それはまさしく「文化」という語が明瞭な指示対象を持たないからである。そしてどれほど文化地理学者たちが、戦略上、「サブカルチャー」のための広範な余地をつくり出すため、彼／女らのより新しく明敏な概念化、ないしは彼／女らが＜真に＞文化を構成するものと仮定する諸特徴の拡張されたリストへの関心を主張しようとも、これらは全て真実として残るのである。なぜそうなのか、それは概して、地理学者たちが文化を存在論的な所与として見限ることをしぶしぶ認めているからである。

無限の墮落としての文化

もちろん、地理学者だけが存在論的に所与として「文化」を物象化するのではない。ダナ・ハラウェイ Haraway, D. (1989,308-9, interpreting Strathern 1987) は、「文化」を「芸術（それ自体、内的・建築的な本質を有していると看取される総体である）におけるモダニストの作品のように、知識の対象として、混沌とした世界から切り取られたモダニストの概念」であると提示している。この客体

を創造するために、（多くの他者のに寄り添ってきた）近代の民族誌家は継続的に「われわれ」と「彼／女ら」との間の裂け目を、「ある文化の中に＜入っていく＞フィールドワーカーの中心的な形象」を設定することによって創り出してきた（Strathern 1987, 強調は筆者, Clifford 1986a も参照）。マリノフスキーによる自民族中心主義を批判する文化人類学においてさえ、他者性の観念を強化—それはまさに強化と呼べる—してきたある裂け目は「観察者（主体）と観察される者（客体）との間」に創造されたのである（Strathern 1987,259）。この作業が示してきたように、文化とは観察者／観察される者という二分法（Strathern 1987）、そして特に実体的なその差異を命名し、制御し、描写するプロセスにおいては、可視的なものである。それゆえに、以前は変化やせめぎ合いが見られたところに、安定性や「生活様式」を創り出し、そのやり方において再度の変転を止めるために展開させられてきた概念が文化なのである。文化観念は境界や周縁の地図化、それから形態学の明確化を要求した。すなわち、文化は究極的に世界を差異化するような、領域づけられた客体とならなければならなかったのである。

文化に関するより新しい諸概念は、客体化と領域設定をなお保持しており、それらは文化観念の近代的な展開を示している。文化は完全に別個の自律した単位としては定位しえないとはっきり理解されているにもかかわらず、ヘゲモニックな文化だけでなくサブカルチャー、対抗文化、抵抗文化は、全て地図化され同定されてきた。それゆえ「新しい文化地理学者」やカルチュラルスタディーズの専門家は、ある単一の文化を理論化することに内在する自民族中心主義を避けるために、単一の地点に存在する複数の文化を語ることがより正確であると見なしたのである。しかし、物象化の問題は全く避けられてない。ジェイムス・クリフォード Clifford, J. (1988,11) にとって、「相互に繋がってる世界に、変化が生じる程度にまで介入する人はつねに「非真正的」である」。このことは、人はいつも「文化の間に捉えられている」ということである。グローバルに相互関連している世界において、「特殊性もしくは差異は、ある文化もしくは伝統の連続性の中に全く位置づけられえない」と彼はいう。すなわちクリフォードにとって、

差異とは文化間の「連想的」な空間において構築される。この意味において「アイデンティティとは本質的なものではない」。そうであるからこそ諸文化はいまだに存在してしまうのである。「文化間に捉えられる」ことは、地図化される諸文化やそれらの境界を仮定している。まさに、われわれはあの連想的な空間を見つけるために、それらを地図化しなくてはならない。差異が創り出されなければならない。「文化間に捉えられる」ために、内部者／外部者や観察者／被観察者という二分法は、それを避けることを十分に意図しているにもかかわらず、強化されてしまうのである。それゆえに文化「それ自体」は差異を構築しない。そのかわり、われわれが差異を秩序立てられ、地図化可能で、制御可能なものに変質させることを、文化観念は可能にする。まさに観念こそが、われわれが変化や闘争を文化として物象化することを可能にするのである。

マーティン・ルイス Lewis, M. (1991,605) が近年記しているように、「人間を社会関係の別個の塊に分かつことができるという考えは社会科学全般でますます疑問に付されている」のであり、「一般的な人間の構成単位にラベルを貼るために使用される多様な用語の全てが『問題含みであることを証明する』。このことを理解しながら、ハラウェイ Haraway (1989,309) は「恒久的な分裂や、疑問に付されつねに縮小し差異化された記号・有機体・自己・諸文化を含む知識や実践の『客体』」を理論化する方法に関心を寄せている。彼女が示すところによると、科学に対する疑問とは「単一ではないものに関する知識が、なぜ安定しており、反復可能で、累積する知識であるかのように思えるのか」ということである。ハラウェイにとって、この疑問に対する回答は技巧的なものではない。それは方法に関する疑問ではなく、むしろ「言説において物質化を可能とする『客体』の構造（もしくは反・構造）」への疑問なのである。すなわち、その表象はどのように構築されるのか？そしてどのようにして、これらの構造は経済的・社会的諸関係の日常的な労働に基づいているのであろうか？という疑問である。

ハラウェイが認めるように、「文化」にまつわる問題は、それが無限の墮落の犠牲者であるということである。つまり、もし文化に存在論的な地位が与え

られるなら、文化は内的な一貫性と内包的な方法によって定義可能であるにちがいない。しかしもし文化を定義しようとするなら、理論家は必ず文化の定義自体が他の（外部の）概念や領域に依存していることを発見してしまい、文化の定義は内的な一貫性や内包的な方法（レベル、基盤、媒体、意味体系などなど）によっては定義されえないことが露呈してしまう。それらの定義を明確にするための努力がなされるにつれて、この根本的な状況はいつも減退しており、何も参照することがない（もしくは全てのものを参照する）という結果となってしまう。それらは空っぽの（もしくは過剰な）抽象化として位置する。定義に関する範囲がつねに手の届かないところにあり、ある段階をさらに減退させてしまう意味の存在論的な土台はつねに異なるのである。それらは少なくとも内的には世界に何のルーツも持たない。「文化」がまったくもって実在するのだという信条を保持させようという努力の中で、「文化」はこのように遠回しにアプローチされ、もしくは内的な法則はあいかわらず曖昧なままであると示されるのである。

このようにわれわれは人文学 humanity を、別個の境界付けられた文化というもののの中に詰め込み続ける。すなわち、われわれは文化は存在すると、そしてそれは重要であると主張し続けるのである。そしてこの意味で「文化」は世界の中に存在するようになっている。このことは、リアルなものとなされた概念として、文化は存在しているということである。無限の墮落は実践において抑制されている。抽象化もしくはそれらを覆い隠すために、民族誌家や地理学者、文化批評家、マーケティングもしくは地政学的な戦略家などは、説明としてそれを用いる。定義付けや秩序立てのプロセスにおいては、内的ではなく外部的に、「文化」の抽象化は意味で満たされている。ブルーノ・ラトゥール Latour, B. (1987,201) は文化の墮落を停止させるプロジェクトは社会闘争のプロセスであるとする。

しばしば「言語構造」、「分類法」、「文化」、「パラダイム」、「社会」と呼ばれているものは、すべて互いを定義するのに用いることができる。これらは、論争において主張と結び付いて現れる要素の集合を要約して用いられる。それらはつねに非常に曖昧に定義されている。

る。なぜなら、「文化」、「パラダイム」、「社会」といった言葉は、論争が存在する**<ときにのみ>**、論争が**<続く限りににおいて>**、反対社が行使する強さに依拠してのみ、正確な意味を手に入れるからである。(中略) 言い替えると、他の人々と衝突する**<前>**に、ある「文化」の中に生き、ある「パラダイム」を共有し、ある「社会」に属することはないのである。(強調オリジナル)⁹⁾

科学的知識の生産について考察しながら、ラトゥールは、客体を定義する人々もしくはつねに勝利してきた人々に対して多様な消耗戦や闘争が引き起こされるまで、その客体はいかなる形態も持つことがないのであり、それは不安定な諸活動の「リスト」として科学的言説が生じる中で物質化されるのだと断言した。この点において、これらのリストは物象化されている。すなわち、それらはリアリティを獲得する。それらは形態を獲得する。それらは少なくとも次の闘争が始まるまで、まるで自然中立的で安定したものであるかのように見えるのである(Latour 1987; Mitchell, D. 1994 も参照)。このように考えると、「文化」という言葉は権力関係を表象するための手段となる。「文化」とは「他者」の表象であり、社会関係の中で安定状態にあり、客観的なリアリティを与えられる限りに**<のみ>**結晶化するのである¹⁰⁾。この意味で、文化それ自体よりもむしろ重要となるのは文化観念である。文化観念は人々が行っているものではなく、むしろ人々が行ってきたことを理解する方法である。ジャクソンが文化を例示するために用いるプロセスと活動のリストは、それらが文化で**<ある>**ためではなく、定義の権力をめぐる闘争を通じて(Western 1981)、それらが「文化」であるように**<作られる>**ために重要である。

それゆえ、いかに「文化」がうまく用いられているのかを分析的に理解するために、ある人は(「文化それ自体」と対置するものとして)文化観念に関する社会形成のプロセスに参加しなければならず、その上に、文化観念が、文化とは何か、いかにそれは表象されるか、ということを定義しようとする人々同士の闘争における「勝者」であることを理解しなければならない。彼/女らは自らの「勝利」の法則を表象するために、文化観念という道具を用いるのである¹¹⁾。このように文化は人為的な分別性を示し

ているのであり、それは現実においてつねにせめぎ合ったり盛衰している。それゆえ表層部分であろうが土台部分であろうが、「文化」と呼ぶことは何の意味もなさない。「文化」とはむしろ非常に強力な名前である。なぜならそれは同一化が予定されていることをばやかすからである。文化観念を構造的なベテンとして捉えず、また概念をトップダウンのイデオロギー的な構造化として認識しないなら、文化の分析は文化主義を強化してしまう。つまり、文化は「独立して」存在する、分析対象となる人々においては文化的な差異は必然的にリアルであり根付いている¹²⁾、さらに文化は説明として用いられうるといような仮定は問題である。文化主義において文化は抵抗を形づくっている。文化は地理を持っている(Gregory and Ley 1988)。文化は地表を改変する。

「新しい文化地理学者たち」は、はっきりとその研究において文化主義を否定してきたし、他人のそれを批判してきた(Jackson 1989; Duncan and Ley 1993)。しかし彼らは、「文化決定主義」とラベリングした方がよい「強固な」文化主義の形態と称されるものに対して議論を行っている。ここで私は地理学における多くの文化理論が「不十分」であり続けていると同時に、なお文化主義の形態を保持してしまっていることを提示している。つまり、文化が存在論的に存在するというばかりでなく、むしろ文化は強力に履行された観念であるということの方が、問題なのである。

文化の抽象化・物象化・イデオロギー

ここまでの文化の形象化についての議論に対しては、日常世界における分析家や批評家や演者として、抽象化したり物象化したりするわれわれの能力が全く本質的である、という異論が生じてくるであろう。本稿において私は多くのレベルで作動している全ての種類の抽象化に言及してきたが、以下では私は都市や資本における社会変容やポリティカル・エコノミーの高度に抽象化された観念を用いるつもりである。私の要点は、あらゆる種類の抽象化や物象化が危害に満ちたもので必要のないものであるということではない(Smith and Katz 1993 を参照)。むしろ

るセイヤー Sayer に従うなら、「良い」(合理的もしくは有形物 (Lefebvre 1991))と「悪い」(カオス的な、みだらな、もしくは過度に偏狭な)という両方の抽象化の間で、区分は形成されるということである。合理的、良いもしくは有効な抽象化というものは、種別化可能なプロセスからはっきりと発生しており、内的な一貫性を示している。この分析により明らかになることは、「文化」とは、隠そうとするけれども、合理的ではないということである。文化とは全てのことであり、それだから文化は、日常生活の全体的な範域を示す手段というような最も凡庸なレベル以外では有効な抽象化として作用しえない。もしくは圏域・事物・媒体・慣用としての「文化」を示すための抽象化が制限されたとき、それはひそかに無意味なものへと変わるのである。すなわちそれは非常に狭いものとなる。それは言語・社会関係・社会・国家など他の(それら自身の問題を抱えうる)分析的な用語と同じことを表すようになったり (Gupta and Ferguson 1992 を参照)、日常生活よりも広い領域として物象化されたものや因果的な地位を与えられたものになるのである。このことはわれわれが用いる抽象化がなにがしかの擬態であるに違いないとか、不可能であるというのではない (Barnes and Duncan 1992 ; Duncan 1993)。むしろ私は、(われわれが本当に「現実」かそうでないかを知らうるかどうにかかわらず)「現実」の働きとわれわれによる全ての抽象化とを結びつけているものを考察する必要があると言っているのである。

文化地理学においてこの移行を生じさせることは、「新しい文化地理学」においてしばしば不在である決定的な疑問をわれわれに提示するであろう。すなわち、誰が物象化するのか? という問題である。なぜなら文化観念がいつもイデオロギーとしての機能を有しているためである。文化観念はつねに一連の社会的行為者の<ために>作用する(定義上の作業が対峙させられたときでさえ)。文化観念が用いる手段は社会的に意図的なプロセスである。すでに示した文化の定義と比較したとき明らかであるように、定義としてはほとんどの「文化」の定義に見られる以外の方法で、活発な意図が中心を占めている場合を除いて)、トンプソン Thompson (1984) が言うようにイデオロギーは「特定の関心の追求を容易

にする意味体系」である。その目的として、その体系は「支配の関係」を支える (Baker 1992,3 より引用)¹³⁾。それ以上に、ベーカー Baker, A. (1992,5) が説明したように、イデオロギーは「あらゆる部分をそのコンパスに持ち込むことによって、生活世界全般を神聖にしよう」と企むのであり、「このために聖なるものと俗なるもの、明るさと暗さ、内部と外部、『われわれ』と『彼/女ら』を強調する」のである。「文化」と同じく、イデオロギーはあらゆるものになるうとする欲望を持つ。このようにイデオロギーは「グローバル化の機能を本来的に持つ完璧な体系である。つまり、それらは社会、過去、現在、未来の全体的な表象をも提示しており、完全な人生観 *Waltanschauung* へと統合された」(Duby 1985,151 ; Baker 1992,5 より引用)。そしてミッチェル Mitchell, T. (1990,561) が議論しているように、これはまさに「文化」が行っている作用である。テクストとしての文化もしくは領域としての文化という理論において作られる「特殊な実践とその枠組みの構造とを区分すること」は、「そのような非物理的な枠組みもしくは構造が明確に実在することが、明らかに近代の権力のメカニズムによって導入された効果であり、この近代的な支配のシステムが保持している排他的かつ強力な効果を通してのものである...ため...問題である」。この文化のメタファーを通じて維持される権力や支配はまさに(ある存在論的な「文化」よりもむしろ)「文化」の抽象化を日常生活世界につなぎ止めるものであるといえよう。

この意味で、「文化」とはイデオロギーであるが、単なる「誤認 *false consciousness*」ではない。スミス Smith, N. (1990,15) によるイデオロギーの定義がここで有益である。

イデオロギーは、自らのパースペクティブからリアリティを捉える所与の社会階級の実践的な経験にもかかわらず、というよりそれゆえに単なる一連の間違った観念ではなく、部分的にのみ、実際の経験に基づいた一連の観念なのである。こうして、リアリティを部分的に反映しているにすぎないにもかかわらず、階級はそれ自身の世界に対する認知を全体化しようとするのだ。

それゆえに文化の命名や表象は、グローバル化する一方で部分的な真実を創り上げる。社会的相互作用

を個々の文化に局所化することによって、そして諸活動のいくつかを「文化的」なもの（そしてそれゆえに意味が存するある人間やある領域の性質）として囲い込むことによって、議論を生じさせるような諸活動は文化観念に内包された部分的な真実へと抽象化される。すなわち、真実と、人々の中の深い差異が明らかに存在するのである。文化観念を強調することにより、いかにこれらの部分的な真実が文化に関する言説として全般化されグローバル化されているか、いかに文化は別のレベルにまで持ち上げられ、もしくはそれ独自の領域を形成させられているか、ということのをわれわれは理解できる。

クリフォードのような民族誌家にとって、部分的な真実の認識は「まるで人々が個々の客体もしくはテキストであるかのように、他者について記すことがもはやだれにもできない」というところに行き着く。しかしこの自由が確立するためには、われわれは存在論的な文化観念を拒否する必要がある。というのは、われわれが見てきたように、文化観念とは、部分的なことを真実全体へと物象化するというように、共通の特徴や差異を単一の事物もしくは領域に物象化して考えることであるからである。より重要なこととして、ポストモダン民族誌家はもはや「他者」について語り表象しようとすることができない一方で、そうしたがる人は豊富に存在するのだ。広告家、政治家、局所的な企業家、マーケティング、旅行のプロモーター、ロックスター、その他全ての種類の社会的行為主体はすべからず幸福なために、（先進的で最も市場化しうる装いを持つ）多文化主義もしくは徹底的な文化的抑圧の名においてこの本質化を継続できないでいる。文化観念は、行為主体の全ての方法によって継続的に用いられ、物象化される。いかに民族誌家や地理学者やその他の知識人が敏感になろうとも、日常的な社会において「文化」は売り込みを行い、そして物象化された文化観念は説明する。このことこそ、文化<観念>がより徹底的に理解されなければならない理由である。さもなければ、この観念を展開する能力に在する権力は不明瞭でありつづけ、また文化地理学の分析はそれ自身の客体を理論化することの不可能性によって阻害され続けるであろう。

現代社会において文化を表象する

ここまで私は文化が存在論的に実在していると考え、これは欺瞞であり、この欺瞞性を認識することにより、われわれは、いかに文化観念が社会において機能しているのかということを理解する重要な研究を行っていると議論してきた。つまり、もし文化地理学者がこの課題に取り組まなければ、われわれは意図するにせよしないにせよ文化主義を強化し続けるであろう。そして私は「文化」の抽象化が持つ無意味さを認識することによって、われわれが重要な問いを発することができると言ってきたのである。すなわち、誰が物象化しているのか？ 誰の関心の中で文化観念は展開しているのか？ いかなる権力関係が（先進的で最も市場化しうる装いを持つ）この観念を支えているのか？ 文化観念は、強力な社会的行為者による能力を介して、無限の墮落を停止するために、外部からいかに操作されリアルなものとなっているのか？ という問題である。簡単に言うと、私は、常識的と考えられている観念が展開する陰に隠された果敢と志向性を捉え始めることができると言っているのである。

私の本稿での目的は、「文化」の存在論的なルーツへの探求を放棄することに反対することであり、私は自身のそうすることに対する論拠はまっとうであると考え。しかし正直に言うと、私は完全にこうした運動がもたらす結果を理解しているわけではない。そうではあるけれども、以下では、私は文化観念に照準を合わせることにより（事物・領域・体系・レベル・圏域・属性としての）「文化」を放棄することが、文化地理学に対して重要な意味を持っていることを示したい。これにより、物的な秩序と、意味もしくは文化という異なる圏域を2つの正反対の領域に世界を分けてしまうことの不可能性と、またともなくにもそれらの区分を強化するような「権力の戦略」を理解することができるだろう。

「人種」に対する批判的なアプローチは、いかに人種の観念が「その場で」真実味を帯びるのか—いかに人種に関する観念が非常にはっきりとした観念的・物的な諸実践によって強化されているのか—ということを示すために、「人種諸関係の産業」を研究してきた¹⁴⁾。同じようにわれわれは学術的な理論化

と「文化的生産」の形成という双方において、文化産業（そして今までに確かに「文化的関係の生産」を行ってきたもの）を論じることができる。近年の西洋資本主義社会について記述するハーヴェイ（1989,346）は、「生産・マーケティング・消費システム」の中で深く結びつけられており、審美的な判断の編成を含む「文化的生活 cultural life」を描き出している¹⁵⁾。この観念を一般化するため、そして恐らく別の時間と場所に適応させるため、われわれは「文化的生活」—もしくは最終的に「文化」と呼ばれるもの—が、部分的には日常生活における生産と消費の媒介物であることを提示してきた。ラトゥールによると、文化観念は、生産と消費のシステムの間の矛盾を規格化し正常化する必要性、つまり抵抗や戦略を名づけたり定義するため、またラトゥール（1987）示したような方法で固定化し理解可能なものにするために生じる。この（おそらく限られた）意味では、「文化」とは多様な「ポリティカルエコノミー」の策謀により文化<として>表象されるという過程を経た観念である。ある観念は特定の表象のシステムに基づいているとするなら、文化観念は異なる社会、異なる局所化、そしてもちろん<この>社会の党争を判断するためのある方法であることができる。異なる社会の「生活様式」に対する評価の仕方はそれ自体、特定の社会・経済システムにおいて非常に構造化されたものなのである。

「文化産業」は実践・観念・活動・言語・製品などを文化の表象に変形させながら、「文化のポリティカル・エコノミー」といえるようなものを実行したり調停するのであり、その表象はグラムシ Gramsci, A.（1971,242）が「社会統合 social integration」と呼ぶものを目論んでいる。文化産業は政治的、経済的、社会的実践のせめぎ合いを、まるでそれらが自然中立的で社会にとって必然的なものであるかのように見せようとする。だから文化観念に焦点を当てることにより、われわれはこれらの意図を理論化できる。またそれにより、文化観念が異なる社会において確固とした社会的秩序の名のもとに、差異を自然のように見せたり取り除いていること、われわれの生活を統治する多様な社会システムに固有の矛盾が、「文化」の領域に包含されること、さらにそれらは飼い慣らされ、ゆるやかに変化し、

人々自身に内在するものとして物象化されていることを理解することができるのである（Olwig 1993 を参照）。

この統合のプロセスははっきりと示すことができる。例えば、民族誌的な調査の局地化する戦略においては、調査とは「他者」を理解しやすくすることとそれらのグローバルな（全体的な）文脈からみてヨーロッパの読者の「モラル」を表象しようとしているのであって、この統合的な機能は他者の他者性を物象化して考えることによって、そして「普通の人」のパロールの中に「奇妙なもの」を持ち込むことによって進められてきたのである（例えば Strathern 1987）。そしてこれらの表象の媒介物は、排他的ではないけれど、貨幣経済である（例えば Said 1993）。局所化、異国風化 exoticization、調整といったもの全ては、拡張し続ける資本主義経済によってのみ規定されているわけではないが、確かに歴史的に関係しているのである。ハーヴェイ（1989）が示したとおり、近年の生活の顕著な事実は、「文化的生活」が「より一段と...現金の繋がりがや資本循環の論理の中に巻き込まれている」ことである。ハーヴェイは、このことは「文化的」と呼ばれるシステムにおける全ての活動が「<この後の>利益生産の諸関係に従って強化もしくは放棄」されるということを含意しない、とすぐに読者に提示している。しかしながら、資本の論理は「これらの活動の中に巻き込まれてきた」のである。このように「文化」と呼ばれるものは、ローカルなそしてよりグローバルなスケール両方で行われる社会的再生産のシステムの一部であり一群である。「文化」はグローバルに統合された社会的再生産のシステムの一部として、もしくはそのシステムにおいて古い「素朴さ」を想起させるものとして表象される。「生活様式」とはこのグローバルなシステムの一部として表象されているのであり、さらにそれらの相対的な自律性をつねに帯びている。つまり、「文化」の流通とは、いくつかのスケールでの繋がりを否定することによって、またローカルな価格設定維持政策を越えることによって統合していく能力なのである。文化観念の価値は、繋がりをぼやかすことによって差異を表象したり物象化できるということなのだ。「文化」が「他者」を生産するが、「他者」は「文化」を作れない¹⁶⁾。文

化の無限の墮落は、定義と表象のプロセスによって、そして差異化と支配的な世界システムへの統合によって停止されるのである。

フレキシブルなイデオロギーとして、文化観念それ自体は媒介され、再構築され、変形される。その「文化」の結晶化は労働集約的である。おそらくこのことは現代の都市における文化的な媒介のプロセスを研究することによって、はっきりと示すことができる。これらの文化的媒介のプロセスを理解するために、シャロン・ズーキン Zúkin, S. (1991) は「批判的な組織形態 critical infrastructure」と彼女が呼ぶものを論じている。それは、文化観念を履行し、その代わりに文化を結晶化させ、さらに「文化」と呼ばれるものを生産することを仕事とする者たちである。これらの批判的な組織形態のメンバーは区分を作り出していく。これは芸術批評家、学術的批評家、新聞のコラムニストそして映画批評家であるが、より広範なオーディエンスに対して世界の多様な「他者」を描写する文化人類学者であり歴史家であり地理学者でもある。同じく重要なことは、場所の「われわれ性」、建築物の審美的な愛で方、われわれと「彼／女ら」との区別を示す消費といったライフスタイルや「コミュニティ」を売ることによって、ディベロッパーや政治家たちは、経済的・政治的な利益を作り出そうとしている (Garreau 1991 を参照) 17)。

批判的なインフラストラクチャーの中での労働者は、「日常生活」が形成され知られるようになることに貢献している。そして、その活動によって主に「観念的なそして特に芸術的な活動の諸作品と諸実践」 (Williams 1983, 90) は、物象化された文化へと転換される。ズーキン (1991) の分析においては、「文化」は物象化された総体として生じるのではなく、また人々が物的な世界を理解できるような領域・レベル・「意味体系」でもない。むしろそれははっきりとした境界画定と解釈のプロセスであり、人々と事物の双方についての構造化された表象の体系である。人種観念と同様に、文化観念は継続的に再/投資されており、調停のプロセスを通して真実とされるのである (例えば Jackson 1987a)。

文化資本の観念をブルデュー Bourdieu から借りながら、そして文化資本が批判的な組織形態におけ

る労働者の生産物であることを示すためにそれを変形しながら、ズーキン (1991, 260) は「市場に基づいた資本の循環の中で、文化的な製品やサービスは商品として統合されている時、まさに真の資本を構成する」と記している (Zúkin 1991, 310, note 48 も参照)。批判的な組織形態の役割は、その生産物や実践が資本循環のシステムの中に確実に組み込まれること、またそれらが「文化」の象徴として確実に知られるようになることである。本質的には、ズーキン (1991, 202) は文化変容の労働理論を提示しており、それは階級の特定の分割が「高級な消費を容易にする審美的な批判を可能にする」中で生じる。「批判の生産者は、新たな消費の組織化において批判的な役割を果たすのである」。もちろん、その組織化が近年変化してきた (Glennie and Thrift 1992) としても、また 1980 年代の合衆国やヨーロッパでたしかにこれらの者たちが徐々に明らかになってきているとしても、このことは新たな現象では全くない。

このように文化観念は、徹底的に現代世界のポリティカルエコノミーの中に包み込まれている。ハーヴェイ (1992, 314) が主張するように、

もしかつてそれが存在していたとしても、下部構造 (経済) と上部構造 (文化) の間に存在する区分を形成するための理論的根拠はすでに消え去っている。高級なものと低級なもの双方、資本主義的の価値を支持するものと批判するもの双方を含む文化的生産は今や、通貨の評価と循環のシステムの中で複雑に結びついた商品と化している。このような状況下で、文化的な生産物は多様なベネトンの色彩やハインズが遠い昔に先駆けた有名な 57 種類の製品と大して変わりが無い。... それ以上に、全ての対抗的な文化 (そしてその多くのものは商品化された様式の中ではさらに明示されなければならない、このように、重要な方法により対抗的な運動の勢力を制御しているのである。

現代を過去から切り離して設定するのは「文化」ではなく、商品化の法則である。ハーヴェイが提示しているのは、「文化」と呼ばれているものが、日常生活の絶え間ない再生産の中に巻き込まれているということである。そしてそれは、生産と消費、さらには権力の諸関係と分かちがたいのである。

「上部構造」からの「下部構造」の分別は、マル

クス主義者以外の者たちも行う (Mitchell, T. 1990 も参照のこと) イデオロギー的な運動を除いて、いかなる意味も創り出さない (例えば Jackson 1991)。まさに文化観念は、経済の諸活動と社会生活における別の側面における諸活動との間に、イデオロギーのくさびをはっきりと打ち込んでいるのである。多様な「日常生活」に見られる精神的な特質・習慣・パターンと同様に、(文化を定義したが保守的な批評家として)「考えられたり知られたりしている最たるもの」は、自由に漂い、日常生活における物的な社会・経済的諸労働の上部に彷徨している状況を支配し、社会的に制御するシステムの中で作用させられている¹⁸⁾。

ジャクソン (1989, 186: 邦訳 228) が位置づけたように、「文化地図は」状況に即した「多様な読みとりが可能である」。しかしある読みは閉じられていること、また、「文化」とは、複雑でせめぎ合いを見せる権力のシステムであり意味のペテンであるということとはより重要である。つまりそれはそれ自体の、もしくはそれ自体の中にある事物・プロセス・領域ではないのである。ジャクソン (1989, 185) も書いているように、「意味はそれが由来している物的な世界とつねに関係付けられなければならない」。このことは、「文化」それ自身の意味が持つ確かな真実である。それは文化を形成する階級の作業に由来し、いつもかなり媒介されている。そして、それはある一元的なもしくは世界的な社会集団や諸社会の嗜好や区分や欲望から、直接的もしくは有機体的に生じるものではないのだ。

それゆえにわれわれは、文化は実在していないと認識することにより、文化観念が生産と再生産の社会的関係の中で、もしくはそれを通してどのように存在しているのか、ということを理解するための困難なプロセスを始めることができる。われわれは、誰が「批判的な組織形態」を構成し、誰がいつ何時に「文化」を物象化するイデオロギー的な作業を行うのか、ということをつまえることができるのである。もしこのことが文化地理学の目的を制限していると思えるなら、それはわれわれが、抵抗の幻想に惑わされ、また多様性によって圧倒されているからである。対抗的な諸形態が外見以上のものであることを示し、同時に他方で強力なものの効果を最小化する

ことにより、われわれはイデオロギーとして文化観念をつまえてこなかった。われわれは今や、1960年代の動乱から出現した多様な「新しい」地理学が持っていた重要な政治的目標を捨て去ってしまう危険を冒しているのだ。多くの地理学者が近年転回して向かっている文化の捉えどころのない実態とは、その実単なる文化<として>の表象なのである。そして<そのこと>を理解してなされなければならない研究が多く存在するのである。

結論

まず、少なくとも暗に文化超有機体的な事物としての文化に言及することによって、そして近年では、意味の領域・分野・レベル・基盤・媒介物・体系として文化を理論化することによって、文化地理学者は永らく自身の研究の対象を定義しようとしてきた。2つのアプローチは、文化が存在論的な地位を有している、すなわち真に存在していると主張することにより阻害されてきた。その上、「人種」と同じく、「文化」は混乱した世界に存在する社会的なペテンである。さらに非常に重要なことなのだが、世界を秩序付け定義する手段としての、文化<観念>の歴史的発展こそが<本当に>存在しているのである。文化観念は局地化を要求する、すなわちそれは、社会的相互作用のスカラー的混乱を犠牲にしながらははっきりと画定された区分を必要とするのである。どれほど多くの活動が鎮圧されたとしても、文化は分割によって統合していく観念なのである。おそらく、「文化」とは古典的な「混乱した概念」である (Sayer 1984) ということができるとしても、実にそれ以上のものなのだ。「文化」はかなり複雑であるため、それは明示されねばならないものを曖昧にする。「文化」の力は、諸活動を描写したり分類したり、あるいは切り取って安定した総体の中に詰め込んできた能力に内在しており、それだからそれらは名付けられたり、人々の特性を示されたりするのである。

混乱した (しかしそれでもなお非常に構造化された) 世界の諸側面を支配したり秩序付けるために文化観念が機能していることに焦点を当てることにより (そしてわれわれはこれと同程度強力な言葉を再

び用い始める必要がある),文化地理学者は「文化」に対する徹底的に批判的なアプローチを展開することができるであろう。文化超有機体説,もしくはより新たな文化観念である生活の基盤と表層部分という2つの観念から文化を解き放つことにより,われわれは,いかに文化主義が社会的実践の中で作用しているかを捉えることができる。このような移行は,「文化」がペテンであること,そして命名と定義の社会的プロセスであることを示す。このことは支配階級の権力を暴き出し,また対抗的な運動をも明らかにしていくのであり,その対抗的な運動は戦略と戦術を発明し,関係性を変形させ,器物・文学・音楽・オルタナティブな経済などを生産する。それらは自身の勢力を用いて別個の文化領域の中に何とかして忍び込もうとするのではなく,むしろその権力は,日常生活が営まれる中で,(空間的なそしてそれ以外の)物的な実践を変形させながら,日常生活の諸物質の外側に構築される。非常に大きな傘の下にそれらを覆い隠してしまうために,「文化」としてのこれらの諸実践を分類することには何の意味もない。そんなことをすれば,これらの諸実践が作用している様態を捉える能力が減退してしまうのである。

以上のことは文化地理学に対して実行可能な課題を提示している¹⁹⁾。例えば,文化や文化的な差異の表示が植民地化や「民族」紛争や「下層階級」の生産を助長してきたことを精査することによって,強力な諸集団が文化観念を歴史的に操作してきたことが理解できるが,このことによってこそ対抗的な運動をロマン化することでも,多様性を賞賛し続けることでもなく(cf. Price and Lewis 1993),真の社会的プロセス,物的な表象の実践として(Said 1993)「文化の地理学 culture's geography」を真に捉え始めることになるであろう(Gregory and Ley 1988)。批判的な組織形態に関するズーキン(1991)の観念を援用し,また批判的な組織形態に従事する者が「文化」の名のもとに行う役割を提示することにより,私はこれらの方針に沿った研究に向かう1つの道筋を描き出そうとしてきた。探求される他の道筋が数多くあり,文化観念の重要性の認識は,「人種」は属性でも本質化された事物でもなく社会的カテゴリーであるという認識に追従するような,批判的な研究を急増させていくであろう。「人種」と同じく,

「文化」それ自身の中には説明的な価値が全くない(Jackson 1987aを参照)。それゆえにわれわれの目標は,いかに文化観念がある特定の事物・領域・特性・土台として社会的に結晶化されるのか,そのことを明らかにすることでなければならないのである。

付記

以上の論考に対する非難は,全て私に帰する。しかし,編集者であるロジャー・リー Roger Lee,それからつねに同調してくれたわけではないが,私が議論を改善するための刺激を与えてくれた査読者の方々に感謝したい。

注

1. 「新しい文化地理学者」なる語は,無数のパースペクティブから研究を重ねている,かなり混沌とした広範な領域の研究者たちを含むと,私は理解している。この研究の中で私が好み,評価しているものがあり,それは以下のものである。コスグローヴ Cosgrove の,景観の複雑性に目を向けさせ,景観の観念の歴史を理解しようとする試み。ジャクソン Jackson による,ジェンダーやセクシュアリティや人種の中心性をただ単に含有するだけでなく理解するための,徹底的なポリティカルジオグラフィの提唱。ダンカン Duncan の,景観の表象は決して自明のものでなく,それらが内在するテクスチュアリティに留意する必要があることの主張。ダニエルズ Daniel によるマルクス主義とカルチュラルスタディーズの和解の模索など。もちろんこの研究や,「新しい文化地理学者」と呼ばれる人たちの間には合意できない点がある。さらに私が否定する点から全てが発端すること,つまり「文化的」というものが存在論的な実在を持っており,人文地理学の再構成に対して中心的重要性を持っている,と考えることを否定することから全てが始まることも事実である。
2. スミスとカッツ Smith and Katz は,「空間的なメタファーは,それらが空間がそうでないと推定する限り問題である」と提示している。この点については,「絶対空間の自然化...は,空間的なメタファーが仮想的に浮遊する抽象性に変化する傾向や,しっかりと認識されていない領域へと順番に導いていく」のである。これは私が「新たな」文化に関する空間的定義について行いたい主張でもある。
3. コスグローヴ Cosgrove, D.(1983),サーリンズ Sahlins, M.(1976),ウィリアムズ Williams, R.(1983)が示してきたように,「文化」は確かにヨーロッパの観念である。
4. 文化地理学における(特にいわゆるバークレー学派におけ

- る)文化超有機体説は、しばしば「新しい文化地理学者」によって批判されてきた(特に Duncan 1980,1990; Cosgrove 1984; Jackson 1989 を参照)。「新しい文化地理学者」による初期の文化地理学者が有した文化理論の解釈に対する批判としては、プライスとルイス Price and Lewis (1993) を参照のこと。
5. けれども、文化地理学では今でも文化超有機体説が普及している。例えば、近年のアメリカ文化地理学のレビューは「文化地理学の主流は文化超有機体説に満足しているように思われる」としている (Rowntree et al. 1989,212)。
 6. ワグナーとマイケセル Wagner, P. and Mikesell, M. (1962,5) は、「文化地理学者は文化の内的作用に関心を払っていない」として、文化地理学の論集を出版した。二人の著者は後にこのポジションに基づく主張を変えた。このコメントはダンカン Duncan (1980) の文化超有機体説への批判と、続いて起こる「新しい文化地理学」の発展に重要な刺激をもたらした。
 7. ダンカンはウィリアムズ Williams, R. (1982) から大きなインスピレーションを受けており、ジャクソンはウィリアムズやパーミンガム現代文化研究所の重要な研究から彼の理論化を引き出している。私は、ダンカンとジャクソンが「新しい文化地理学」において完璧で実り豊かな文化理論の言明を行ったために取り上げるのである。
 8. ここでは特に意識して引用符を入れた。なぜなら、ジャクソンの研究には、何か別のもののためのメタファーもしくはは使い勝手の良い用語として「文化」が内在しており、そうして「文化」を強調することは、彼の後の研究においてより頻繁に見られるようになるからである(例えば、1991,1993)。ジャクソンは、自ら主張する「文化」という語が持つ能力を疑っているように思われる。本稿で私は、文化地理学の中にその効力が内在したままにすることよりも、その効力を疑い、それを明確にかつ理論化しようとしている。
 9. 私がこの引用を行ったことから明かなように、地理学の用語が持つ外的な機能が吟味されねばならない一方で、それらには多くの抽象化と物象化が見られる。私は「文化」という語が全く吟味されずに用いられてきたために、ここで考えてみたいのだ。コミュニティ、ポリティクス、経済、社会という語が理解のためのメタファーとして作用し、それらの社会的なペテンが世界を構築していることは考察され続けているのに、文化観念はそうされてこなかったのである。
 10. もちろん、「文化」は、さらなる闘争に対する物象化された権力の源泉として絶対不可欠な部分となりうる。
 11. われわれは、ラトゥール Latour によるせめぎ合う言語という考えを、共同作業(もしくは取り込み)という統合的な関係にまで拡張することができるし、それでも彼の考えを減退させることはないと考える。われわれは「勝者」が全能であるという想定も行う必要はない。ラトゥールの公式化が抵抗を組み込んでいることは明らかである。文化を定義する「勝者」の能力は、彼/彼女らが加わっている闘争の性質によって、また抵抗する他者の力によって制限され(可能となる)る。
 12. 人種の観念がしばしば人種化のプロセスによって示されたものたちに内面化されるのと全く同じように、文化観念は確かにそれらの支配下にある者たちに内面化されるであろう。
 13. まさに概念として、文化は、その内部に矛盾よりも共通性の方が多いシステムを描く手段としてつねに用いられてきた(そしてそのために支配の関係性は中心的なものとなるのである)。もし最も活発な文化の定義さえもが矛盾の解消を想定していなかったのなら、「文化それ自体」の信仰はどの昔に捨て去られてしまったであろう。
 14. 私の文化観念に対する取り組みは、地理学だけでなく、人種観念の制度的な構築に焦点を当てた研究(例えば、van de Berghe 1967; Miles 1982; Jackson 1987b; Smith, S. 1989; Cross and Keith 1993; を参照のこと。生態学においては、Gould 1981; Stephan 1982; Lewontin et al. 1984 を参照のこと)からもインスピレーションを得ている。もちろん、人種の観念が文化観念以上に、本質化された生態学の観念と密接に結びついていたため、両者は全く同じとはいえないが、人種の観念と文化観念が展開されてきた過程には重要な類似性が認められるのである。
 15. ジャクソン Jackson, P. (1993) のこの考えに関するコメントと拡充も参照のこと。
 16. 私は抵抗が不可能だと論じているのではなく、それとは正反対である。まさに、文化の分類を行う支配的なプロセスに対抗し、また自らの運動を統合するために「文化」のある言語を発展させることに関心を示す中で、抵抗する諸集団はそれを発見するのであろう。しかしそれは、私が労働における支配階級について論じているものとは異なるプロセスなのではなかろうか? 「対抗文化」もしくは「サブカルチャー」においては、あらゆる種類の矛盾が、文化観念全般の中に包摂されていないのではなかろうか? ジャクソン Jackson, P. (1991,219, note 6) は近年、「統一体としての文化」という考えに反対して、文化にアプローチする「文化の政治学」の価値は、「『生活様式の全体』として定義されてきた文化の複数性を主張し、またそこではイデオロギーが彼/彼女の物的な利益との関係において解釈される」ことであると述べている。このことは、いかなるスケールにおいて「生活様式の全体」が特化されるのか? という単純な疑問を生じさせる。ジャクソンは個人以上のスケールを想定しているが、それではなにが「生活様式の全体」を形成するのであろうか?
 17. ガリユー Garreau (1991) は、たとえ彼の分析が文化主義的であるにせよ、これらの問題を現代のアメリカにおける都市の領域において考えるために重要な経験主義的基盤を確立した。
 18. これに対する経験主義的な論証としては、例えば、Cosgrove (1984,1989); Jackson (1989,1991,1993); Ley and Duncan (1993b); Gregory and Ley (1988) 所収の論考を参照のこと。
 19. もちろん、私が提示してきた考えに沿った研究はすでになり蓄積されている。私は単に、この研究における構成要素

としての文化観念に焦点を当てることにより、その批判的な役割が強化されうるということを明らかにしたのである。

参考文献

- Baker, A., 1992, Introduction : on ideology and landscape. in Baker, A. and Biger, G. eds., *Ideology and landscape in historical perspective*, Cambridge university Press, Cambridge, pp.1-14.
- Barnes, T. and Duncan, J., 1992, Introduction : writing worlds. in Barnes, T. and Duncan, J. eds., *Writing worlds : discourse, text and metaphor in the representation of landscapes*, Routledge, New York.
- Berger, P. and Pullberg, S., 1964-5, Reification and the sociological critique of consciousness., *History and Theory* 4, pp.196-211.
- Bourdieu, P., 1984, *Distinction : a social critique of the judgement of taste.*, Harvard University Press, Cambridge, MA. (ブルデュー, P. / 石井洋二郎訳 (1990) 『ディスタンクシオン』 藤原書店)
- Clifford, J., 1986a, On ethnographic self fashioning : Conrad and Malanowski. in Heller, T. Wellberg, D. and Sosna, M. eds., *Reconstructing individualism.*, Stanford University Press, Stanford.
- Clifford, J., 1986b, Introduction : partial truths. in Clifford, J. and Marcus, G. eds., *Writing culture.*, University of California Press, Berkeley, pp.1-26. (クリフォード, J., マーカス, G. / 春日直樹ほか訳 (1996) 『文化を書く』 紀伊國屋書店)
- Clifford, J., 1988, *The predicament of culture : twentieth-century ethnography, literature and art.*, Harvard University Press, Cambridge, MA.
- Cosgrove, D., 1983, Towards a radical cultural geography ., *Antipode* 15, pp.1-11. (コスグローヴ, D. / 中島弘二訳 (1996) 「ラディカル文化地理学に向けて—理論の諸問題—」 日本地理学会「空間と社会」研究グループ編『社会—空間研究の地平—人文地理学のネオ古典を読む—』)
- Cosgrove, D., 1984, *Social reproduction and symbolic landscape.*, Croom Helm, London.
- Cosgrove, D., 1989, Geography is everywhere : culture and symbolism in human landscapes. in Gregory, D. and Walford, R. eds., *Horizons in human geography.*, Barnes and Noble, Totowa, NJ, pp.118-135.
- Cosgrove, D. and Jackson, P., 1987, New directions in cultural geography., *Area* 19, pp.95-101.
- Cox, K. and Mair, A., 1989, Levels of abstraction in locality studies., *Antipode* 21, pp.121-132.
- Cross, M. and Keith, M. eds., 1993, *Racism, the city and the state*, Routledge, London.
- Daniels, S., 1989, Marxism, culture, and the duplicity of landscape. in Feet R and Thrift, N. eds., *New models in geography.* vol. , Unwin Hyman, London, pp.196-220.
- Duby, G., 1985, Ideologies in history. in Le Goff, J. and Nova, P. eds., *Constructing the past : essays in historical methodology.*, Cambridge university Press, Cambridge.
- Duncan, J., 1980, The superorganic in American cultural geography., *Annals of the Association of American Geographers* 70, pp.181-198.
- Duncan, J., 1990, *The city as text : the politics of landscape interpretation in the Kandy Kingdom.*, Cambridge University Press, Cambridge.
- Duncan, J., 1993, Sites of representation : place, time and the discourse of the other. in Ley, D. and Duncan, J. eds., *Place / culture / representation.*, Routledge, London, pp.39-56.
- Duncan, J. and Ley, D., 1982, Structural Marxism and human geography : a critical assessment., *Annals of the Association of American Geographers* 72, pp.30-59. (ダンカン, J.・レイ, D. / 木下雅夫ほか訳 (2000) 「構造主義的マルクス主義と人文地理学—その批判的検討—」 法政人文地理フォーラム 3)
- Duncan, J. and Ley, D., 1993, Introduction : representing the place of culture. in Ley, D. and Duncan, J. eds., *Place / culture / representation.*, Routledge, London, pp.1-21.
- Garreau, J., 1991, *Edge city, life on the new frontier.*, Doubleday, New York.
- Glennie, P. and Thrift, N., 1992, Modernity, urbanism, and modern consumption., *Environment and Planning D : Society and Space* 10, pp.423-443.
- Gould, S., 1981, *The mismeasure of man.*, W W Norton, New York. (グールド, S. 『人間の測りまちがい : 差別の科学史』 河出書房新社)
- Gramsci, A., 1971, *Selections from the prison notebooks.*, International Publishers, New York, and Lawrence and Wishart, London. (グラムシ, A. 著 / ジェルラターナ, V. 編 / 獄中ノート翻訳委員会訳 (1981) 『グラムシ獄中ノート』 大月書店)
- Gregory, D., 1993, Interventions in the historical geography of modernity : social theory, spatiality and the politics of representation. in Ley, D. and Duncan, J. eds., *Place / culture / representation.*, Routledge, London, pp.272-313.
- Gregory, D. and Ley, D. eds., 1988, Culture's geographies Special issue of *Environment and*

- Planning D : Society and Space* 6.
- Gupta, A. and Fergusoh, J., 1992, Beyond 'culture': space, identity and the politics of difference., *Cultural Anthropology* 7, pp.6-23.
- Haraway, D., 1989, *Primate visions : gender, race and nature in the world of modern science.*, Routledge, New York
- Harvey, D., 1989, *The condition of postmodernity : an enquiry into the origins of cultural change.*, Basil Bachelor, Oxford.(ハーヴェイ, D. / 吉原直樹監訳(1999)『ポストモダンティの条件』青木書店)
- Harvey, D., 1992, Postmortern morality plays., *Antipode* 24, pp.300-326.
- Jackson, P., 1987a, The idea of 'race' and the geography of racism., in Jackson P ed., *Race and racism.*, Allen and Unwin, London, pp.3-21.
- Jackson, P. ed., 1987b, *Race and racism.*, Allen and Unwin, London.
- Jackson, P., 1989, *Maps of meaning : an introduction to cultural geography.*, Unwin Hyman, London.(ジャクソン, P / 徳久球雄, 吉富亨訳(1999)『文化地理学の再構築 : 意味の地図を描く』玉川大学出版部)
- Jackson, P., 1991, Mapping meanings: a cultural critique of locality studies., *Environment and Planning A* 23, pp.215-228.
- Jackson, P., 1993, Towards a cultural politics of consumption. in Bird, J. Curtis, B. Putnam, T. Robertson, G. and Tickner, L. eds., *Mapping the future : local cultures, global change.*, Routledge, London, pp.207-223.
- Keith, M. and Cross, M., 1993, Postmodernism and Utopia : an unholy alliance. in Cross, M. and Keith, M. eds., *Racism, the city and the state.*, Routledge, London.
- Kroeber, A. and Kluckhohn, C., 1963, *Culture : a critical review of concepts and definitions.*, 1st. edn. 1952, Vintage, New York.
- Latour, B., 1987, *Science in action : how to follow scientists and engineers through society.*, Harvard University Press, Cambridge, MA.(ラトゥール, B. / 川崎勝, 高田紀代志訳(1999)『科学が作られているとき : 人類学的考察』産業図書)
- Lefebvre, H., 1991, *The production of space.*, Basil Bachelor, Oxford.(ルフェーブル, H. / 斎藤日出治訳(2000)『空間の生産』青木書店)
- Lewis, M., 1991, Elusive societies ; a regional—cartographical approach to the study of human relatedness., *Annals of the Association of American Geographers* 81, pp.605-626.
- Ley, D. and Duncan, J., 1993a, Epilogue. in Ley, D. and Duncan, J. eds., *Place / culture / representation.*, Routledge, London, pp.329-334.
- Ley, D. and Duncan, J. eds., 1993b, *Place / culture / representation.*, Routledge, London.
- Lewontin, R. Rose, S. and Kamin, L., 1984, *Not in our genes : biology, ideology and human nature.*, Pantheon, New York.
- Mikesell, M., 1978, Tradition and innovation in cultural geography., *Annals of the Association of American Geographers* 68, pp.1-16.
- Miles, R., 1982, *Racism and migrant labour.*, Routledge and Kegan Paul, London.
- Mitchell, D., 1994, Landscape and surplus value : the making of the ordinary., in Brentwood, CA. *Environment and Planning D : Society and Space* 12, pp.7-30.
- Mitchell, T., 1990, Everyday metaphors of power., *Theory and Society* 19, pp.545-577.
- Nelson, L., Treichler, P. and Grossberg, L., 1992, Cultural studies : an introduction., in Grossberg, L. Nelson, C. and Treichler, P. eds., *Cultural studies*, Routledge, New York, pp.1-16.
- Olwig, K., 1993, Sexual cosmology : nation and landscape at the conceptual interstices of nature and culture ; or, what does landscape really mean ? in Bender, B. ed., *Landscape politics and perspectives*, Berg, Oxford, pp.307-343.
- Price, M. and Lewis, M., 1993, The reinvention of cultural geography., *Annals of the Association of American Geographers* 83, pp.1-17.
- Rowntree, L., Foote, K. and Domosh, M., 1989, Cultural geography., in Gaile G and Wilmott C eds., *Geography in America.*, Merrill, New York, pp.209-217.
- Sahlins, M., 1976, *Culture and practical reason.*, University of Chicago Press, Chicago. (サーリンズ, M. / 山内昶訳(1987)『人類学と文化記号論 : 文化と実践理性』法政大学出版局)
- Said, E., 1993, *Culture and imperialism.*, Alfred A Knopf, New York. (サイード, E. / 大橋洋一訳(1998)『文化と帝国主義』みすず書房)
- Sayer, A., 1984, *Method in social science : a realist approach.*, Hutchison, London.
- Smith, N., 1990, *Uneven development : nature, capital and the production of space.*, 2nd. edn., Basil Bachelor, Oxford.
- Smith, N. and Katz, C., 1993, Grounding metaphor : towards a spatialized politics., in Keith, M. and Pile, S. eds., *Place and the politics of identity.*, Routledge, London, pp.67-83.
- Smith, S., 1989, *The politics of 'race' and residence :*

- citizenship, segregation and white supremacy in Britain.*, Polity, Cambridge.
- Stepan, N., 1982, *The idea of race in science : Great Britain, 1800-1960.*, Macmillan, London.
- Strathern, M., 1987, Out of context : the persuasive fictions of anthropology., *Current Anthropology* 28., pp.251-281.
- Thompson, J., 1984, *Studies in the theory of ideology.*, Cambridge University Press, Cambridge.
- Van den Berghe, P., 1967, *Race and racism : a comparative perspective.*, Wiley, New York.
- Wagner, P. and Mikesell, M. eds., 1962, *Readings in cultural geography.*, University of Chicago Press, Chicago.
- Western, J., 1981, *Outcast Cape Town.*, University of Minnesota Press, Minneapolis.
- Williams, R., 1977, *Marxism and literature.*, Oxford University Press, Oxford.
- Williams, R., 1982, *The sociology of culture.*, Schocken, New York.
- Williams, R., 1983, *Keywords.*, Fontana Press, London (ウィリアムズ, R. / 岡崎康一訳 (1980) 『キーワード辞典』晶文社, ウィリアムズ, R. / 椎名美智他訳 (2002) 『完訳キーワード辞典』平凡社)
- Zelinsky, W., 1973, *The cultural geography of the united States.*, Prentice-Hall, Englewood Cliffs, NJ.
- Zukin, S., 1991, *Landscapes of power : from Detroit to Disney World.*, University of California Press, Berkeley.

追記

今回の翻訳に当たっては大城直樹氏(神戸大学文学部)に多大なご協力をいただいた。また近畿圏の大学院生を中心とした勉強会では本訳について様々なアドバイスをいただいた。記して心より感謝したい。

1980年にDuncanによって行われたアメリカ文化地理学における文化超有機体説への批判,そして具体的には1987年にCosgrove and Jacksonにより言明されたイギリスのカルチュラルスタディーズにインスピレーションを得た「新しい」方向は,経験的な研究を蓄積してきた。アメリカとイギリスでそれぞれ生じた研究は,その出自も発生過程も異なるものの(McDowell 1994),「新しい文化(社会)地理学」として一つの潮流を形成したのである。

これらの研究に対しては発表当初から批判を受けただけであり,それらに対する評価はRowntree(1988)に詳しい。しかし,1980年のDuncanの論考がもはや「古典」とされ,その内実が暴露されるだけでなく,その論文が与えたインパクトが批判的に検討されることから明らかなように(Duncan, Smith and Mathewson 1998),1990年代までに登場した新たな潮流は,それが持つ前代からの遺産を中心に,何が新しく,何が変わっていないのかということについて,1990年代半ばには批判的検討がなされていったのである。このような中にこのMitchellの論考も位置づけられよう。

このMitchellの論考が発表された1年後の1996年,同じく*Transactions of the Institute of British Geographers*誌の第21巻に「文化など存在しないのか?」という特集が組まれ,Cosgrove, Jackson, DuncanによるMitchellへのコメントと,それに対するMitchellの再返答が寄せられている。ここでは特に,MitchellとCosgroveの間に十分な合意点が形成されることはなく,この深い溝はCosgroveの*Social formation and symbolic landscape*の改訂版(1998)に対するMitchell(1999)の書評にも見られることを指摘しておこう。また,Mitchellの論考も参照しながら,Kong(1996)は「新しい文化地理学」の何が新しくなったのかということ,批判的に検討しており,これに対してJacksonがコメントを寄せている。ご参照いただきたい。

また,特にMitchellによるDuncanへの批判は,Duncanの著書*The city as text*に対するPeetの批判と類似性が認められる。批判の思想的背景にまで迫ることができれば,さらなる理論的前進が可能であると思われる。

CrangとMitchellというイギリスとアメリカの若手研究者により,文化地理学のリーディングが出版されたということは,もちろん両者の思想的なバックグラウンドも取り上げられるトピックも異なるものの,新しい文化地理学が批判的検討を経て,90年代を通してひとつの段階にまで到達したことを示しているのかもしれない。しかし,「新しい文化地理学」が思想的刺激を受けたイギリス・バーミンガムの現代文化研究所が2002年夏に閉鎖され,ひとつの時代の終わりを世界中に示した。毛利(2002)が言う

ように、このことは逆にもはや文化研究がイギリス中心のものであり続けることができなくなるほど質的に変化している兆候であるとするなら、日本における文化地理学も新たな展開/転回が求められているのであろう。

文献

毛利嘉孝「カルチュラル・スタディーズの現在」サルダー，Z・ルーン，B(毛利嘉孝・小野俊彦訳)『INTRODUCING カルチュラル・スタディーズ』作品社，176-186 頁。
Duncan, J., Smith, P. and Mathewson, K. (1998) 'Classics in human geography revisited', *Progress in*

Human Geography 22, pp.567-573.

Kong, L. (1996) 'A "new" cultural geography? : debate about invention and reinvention', *Scottish Geographical Magazine* 113, pp.575-586.

McDowell, L. (1994) 'The transformation of cultural geography', Gregory, D., Martin, R. and Smith, G. ed., *Human Geography*, University of Minnesota Press Minneapolis, pp. 146-173.

Mitchell, D. (1999) 'Book review', *Transaction of the Institute of British Geographer N.S.* 24, pp.505-506.

Peet, R. (1995) 'Book Reviews', *Transaction of the Institute of British Geographer N.S.* 20, pp.102-106.

Rowntree, L. (1988) 'Orthodoxy and new directions : cultural / humanistic geography', *Progress in Human Geography* 12, pp. 575-586.